

美術館の教育普及活動に関する研究 国立新美術館のワークショップを事例として

A study on Educational dissemination activities of art museums.
A Case study on workshops of The National Art Center, Tokyo.

○大岩郁穂¹・西島慧子²・堀切梨奈子³・佐藤慎也³

⁸ Ikuho Oiwa¹, Satoko Nishijima², Rinako Horikiri³, Shinya Satoh³

I grasped and examined the actual situation of the workshop at The National Art Center, Tokyo. At The National Art Center, Tokyo we set up the main venue and use various places depending on the contents of the workshop. Spaces that are not restricted to use become various places for educational dissemination activities.

1. はじめに

現在、多くの美術館では、教育普及が重要な活動のひとつとなっている。教育普及活動は、ワークショップをはじめとして、講演会などのイベント企画、学校との連携事業など、その内容は多岐にわたる。美術館が、ただ展示を見るだけの空間ではなくなり、体験や参加を重要視しはじめたのは 1970 年代からである。それから 40 年以上が経過し、美術館の教育普及活動に AY も、求められている空間が変化しているのではないだろうか。

2. 研究目的

国立新美術館^[1]におけるワークショップの実態を把握し、考察することで、現在の教育普及活動に対し Y、どのような機能が求められているのかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

国立新美術館がアーカイブする過去のワークショップに関する資料から、実施数と実施場所に関する文献調査を行う。また、運営スタッフとして参加したワークショップについて、教育普及室が管理している多目的ルーム^[2]の利用実態について実地調査を行う。

4. ワークショップで利用した施設の数

国立新美術館の教育普及事業は、「参加し交流し創造する美術館」を目標に活動している。開館した 2007 年 1 月から、2018 年 8 月までに実施されたワークショップ計 76 回を対象とした文献調査を行った。1 つのワークショップにおいて、レクチャーの場と制作の場を分けるなど、複数の室を利用する場合がある。各ワークショップで利用した数は図 1 のとおりである。



図 1 利用した施設数とワークショップの件数

ほとんどのワークショップが、1ヶ所または2ヶ所を利用して行われている。1ヶ所で行うワークショップでは、講師のレクチャーを交えながらも、集中して作品制作をするものが多い。2ヶ所では、講師であるアーティストの展覧会期間中に行われることが多く、レクチャーを展示室で行い、制作作業からは別の場所へ移動している。4ヶ所以上では、国立新美術館の建物の特徴を取り入れた内容となっている。このグラフから、国立新美術館のワークショップは、複数の場所を利用する内容が過半数であることがわかる。

5. ワークショップ実施場所と回数

各ワークショップの実施場所と回数は図 2 のとおりである。

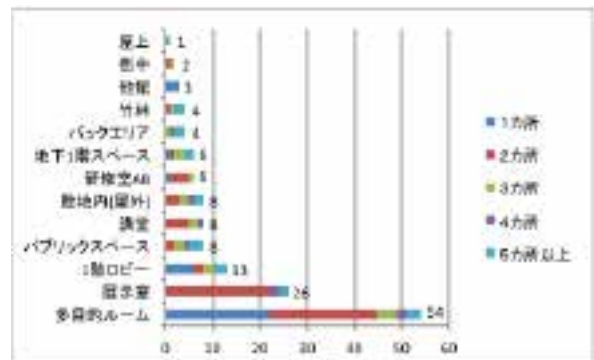


図 2 各実施場所の利用回数

1 : 日大理工・院 (前)・建築 2 : 日大理工・職員・建築 3 : 日大理工・教員・建築

最も利用されている場所は多目的ルームの 54 回で、そのうちのほとんどが 1ヶ所または 2ヶ所である。次に多い展示室を見ると、1ヶ所のときは利用しておらず、2ヶ所がほとんどであることから、展示室と多目的ルームを利用したワークショップが多いと考えられる。多目的ルーム(図3)は、ワークショップを行う会場として設えられているが、参加人数や内容によって、メイン会場を研修室 AB、講堂などに変更している。どの部屋も、机と椅子が自由に動かせることが共通点として挙げられる。



図3 別館3階平面図 S=1/400
(出典：国立新美術館 別館パンフレット)

6. 多目的ルームの使用実態

主に多目的ルームを利用して行われたワークショップについて実地調査を行った。

①「鼻ってどんなカタチ？-ジャコメッティになってみよう」(2017)



図4 平面図 S=1/800 図5 南側レイアウト

このワークショップは、北側を制作スペース、南側をレクチャー・講評会スペースとして利用していた。目的に合わせて南北のスペースのレイアウトを変えることで、参加者の移動や模様替えの時間を省き、制作に時間をあてることができる。

②「サンシャワー 大学生ワークショップ」(2017)

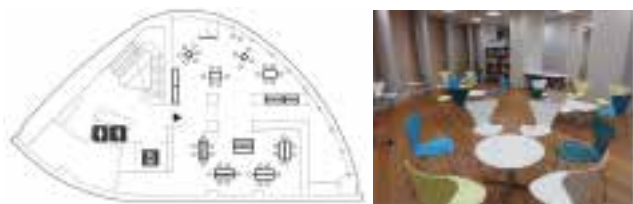


図6 平面図 S=1/800 図7 北側レイアウト

このワークショップは、昼食のための休憩を挟んだスケジュールで行われた。北側は自己紹介を含んだアイスブレイクのスペースに、南側を昼食とディスカッションのためのスペースとして利用していた。初対面の人同士が打ち解けやすい雰囲気をつくるため、北側の机は円形や四角形の高さの低いデザインのものを使用している。自由に動かすことのできる家具であるため、シチュエーションによって変更することができる。

③「SKYSCAPES-空をめぐる想像の時間-」(2018)



図8 平面図 S=1/800 図9 北側レイアウト

このワークショップは、北側を制作スペース、南側をレクチャー・講評会と資料閲覧スペースとして利用していた。制作時間の長いワークショップであったため、南側は休憩スペースとしても利用されていた。中央の通路部分には、制作のための材料スペースを設けている。どのワークショップでも、南北で異なる目的のレイアウトをつくっている。

7. 結論

国立新美術館では、メイン会場を定めつつ、内容によって美術館敷地内の様々な場所を利用している。多目的ルームの代わりとして使用される研修室 AB や講堂も、多目的ルーム同様、机と椅子が自由に動かせるため、様々な場面にに対応することができる。ひとつの拠点を定めることで、様々な場所を会場として利用しても、ワークショップとして成立させることができる。

【注釈】

[1] 2007年に開館した国立美術館。東京都港区に位置する。

[2] 国立新美術館と同じ敷地内にある別館の3階に位置する。部屋には流し台、冷蔵庫を完備し、ワークショップで使用する材料と道具を保管している。

【参考文献】

[1] 成相肇著.” Artwords-教育普及2 現代美術用語辞典 ver.2.0-Artscape. <http://artscape.jp/artword/index.php/教育普及>

[2] 国立新美術館：「やってみよう、アート 国立新美術館ワークショップ記録集 2007年3月-2011年2月」,2011年

[3] 国立新美術館：「やってみよう、アート 国立新美術館ワークショップ記録集 2011年4月-2017年3月」,2017年